

森元美代治さんのお話

今回、森元さんに、教育経験を子どもの立場からのお話を中心に話していただいた。

○奄美大島での子ども時代

小学校1、2年生の時、疎開も経験。

小学校3、4年までは栄養失調ではあったけれど、ほとんど元気に過ごしていました。跳び箱や走り幅跳び、ドッチボールなどのスポーツも楽しんでたんですね。ただ、野球やテニスなどの球技は、道具がなかったから、やったことがなかったかな。だから1日中、泥んこになって外で遊んでいた。家に帰る時に、友達と小川で体の汚れを洗って帰るのだけれども、自分だけは、なかなか足の汚れが落ちずに、友達にも「汚い、もっときれいに洗え」と言われていたんです。ある時、小石で一生懸命こすって汚れを落とそうとして血が出ていて。それでも痛くなかった。子ども心になんだろうなと思いつつ、まさかハンセン病にかかっているとは全然思いもしなかったです。

当時、誇りに思っていたことがある。赤ちゃんのころは、本当に人気の赤ちゃんだった。隣り近所のお姉さんたちがじゃけんなどをして競争しながら自分をおんぶしてくれていたらしい。子どもながらうれしいじゃないですか。そう言われるとその気になっちゃって。かわいがられて、村でやる寸劇の子役にもよく選ばれていたんです。このころから結構目立ちたがり、負けず嫌いだったのかなとも。

中学生1年生になってから医者通いを始めたんです。たまたま村に帰ってきてかくれんぼしていた時に、転んでしまったんです。そのときにできすり傷が真っ赤になっただけでなかなか治らないなと思っていたら、ネズミにかじられていたことがわかって。でも、ネズミにかまれていたのに気づかなかったことを母親が疑問に思っ、お医者さんへ通うように。お医者さんでは、梅毒ではないかと診断され、ペニシリン、サルバルサンなどを打ってみたりしたけれど、全然よくなりません。結局、遠いところの医者に行き、医者通いを続けているうちに、村の人に愛に思われ、いじめが始まっちゃったんですね。中学の終わるころには、完全に遊び仲間から外されちゃいました。たまたま中学1年生の夏に野球をやっていたら、顔が汚くなっちゃったんですね。（ライ菌に）やられちゃっているところが真っ赤になって、やられていないところとまだらになってしまって。友達に「鬼みたいな顔」だと言われて。そんな時に身体検査がまわってきた。私の顔を軍医の先生が見てくれて、「ライ病」だと診断され、療養所に入ったんですけどもね。

○療養所に入るまでの学校生活

小学校時代は、勉強ができない子どもでね。小学校5年生でやった分数が弱くてね。よくたたされて怖かったけれども、それでもどれだけ先生に憧れたか。ある意味、先生になりたいと思っていたんだと思う。やさしい先生になろうと。当時は、木陰で後輩に勉強を教えたりして。自分ができなくて先生が怖かったから、勉強を教えていたのかも。よく面倒を見ました。とにかく、後輩をかわいがるのが好きでした。

できないというコンプレックスを抱えていた自分にとって、中学の英語の先生との出会いが自分を変えてくれました。隣の村に住む男先生は、通勤途中にある私の家を覗いて、「おお、美代治やってるか」なんて声をかけてくれて。それから、だんだん英語が好きになってね。英語のできるほかの生徒たちと一緒に、先生の家に呼んでくれたんですよ。そこに混ざって英語を教えてもらったことがコンプレックスばかりの自分の自信につながって。松山先生というんですが、その松山先生との出会いが、私をして英語を得意にさせたんですよ。英語は、1年から常に5位以内だったと思います。後輩もそのことわかるから、後輩も、試験期間になると「美代治さん、ここどうすんの」って聞きにくるんで親切に教えてあげたんですよ。うれしいから。そういう経験もあって、高校は絶対行けると思っていたんですね。受験組みに入って進学を目指していたのに、療養所に入れられてしまって、受験することができなくなってしまった。高校に行けると思っていたので失望、本当に悔しい思いをしましたよ。

中学3年で入った奄美の療養所には学校はなかったんですよ。どうしたかというね、礼拝堂の舞台裏に楽屋がある。そこで当時、療養所での最高の慰問だった映画をよく見ていたんですよ。その幕がはってある裏、楽屋裏に黒板がひとつあって。勉強机が2、3個あって、小学校と中学だけの複式授業なんですよ。子どもも小学校1年生から6年生まで。3年生がひとりいたのかな。あとは、5年生、6年生。中学生は3年生だけ。私は3年だったけど。私より年上の方が、病気で学校に行かされてなくて、小学生だったりしたんですよ。

○長島高校（新良田教室）のこと

当時、長島高校は、療養所の明るい「希望」のシンボルだったんですよ。その高校のおかげで自分は大学に行けたから自慢したかったんです。卒業生の中には、お医者さんやレントゲン技師、看護師になった人もいたりして、みんなそれぞれ活躍しているんですよ。だから、そういう話をしてね、暗い療養所にも、長島高校という希望の高校があったことを自慢したかったんです。学校長でもあった光田健輔は、入学式や卒業式などで、「この高校は、世界唯一の学校なのだから、感謝して一生懸命勉強して頑張れ」とよく励ましていました。たまたま、インド人のハンセン病回復者のヤガジンソンという医者が、長島愛生園を訪ねてきて講演会に来たことがあって、その人に憧れて医者を目指した生徒もいたんじゃないかなと思うんです。これは、ある意味ではいいことですよ。

けれども、裁判が起こって、自分の中で気持ちが変わってきた。裁判を通して、光田先生が目指していたものはおかしいと思うようになって。裁判の終わりのころには、長島高校の存在は、大変な過ちの高校で、実は、負の遺産なのではないかと考えが変わっていったんです。長島高校ができた昭和30年という時代を考えると、プロミンができて10年が経っている時期。そんな時期に、どうして療養所内に高等学校を作る必要があったのかと思うようになったんですよ。いらなかったんですよ。長島高校がなければ、自分たちは外の高校に行けばよかったんですよ。治るようになってきていたのだから、療養所内に作る必要はなかったはずなんです。

一期生は、定員30名だったんですが、定員の約7倍の200名の応募があったんですよ。しかも年齢制限（どうも30歳までだったらいい）まであったみたいで。倍率が高かったので諦めた人もいました。最初、奄美大島からの受験生は3人いたんですよ、自分も含めて。でも倍率が高いから、落ちたら恥ずかしいってやめてしまっただけでね。たまたま、その2人は治っていたから、退所してしまいました。奄美大島では、教科専門の先生がいなかったし、自分の得意な英語は受験科目になかったから、「やばい！」と思って、自分のことをいじめた村人にも負けたくないという思いもあって、独学で必死に勉強しましたよ。その時受験したのは、自分も含めて64名だった。受からなかった人は何度も受験していたの。そのくらい向学心があったにも関わらず、受けられる高校はひとつだけだったんですよ。あの状況は、果たして憲法で謳われていた機会均等と言えるのか、機会不平等だったと思う。このことに気づいて、100%誇れるものではなかったと思うようになったんです。

お話の中で、退所者に関するお話も出ました。

○退所者の医療の問題

私は、医療を受ける病院を使い分けています。内科や消化器科、眼科はそれぞれの一般の病院。外科とまつげ抜きは全生園を利用しています。今、いわゆる回復者の外来診療は実費負担になっているんですよ。全生園でかかった費用は、厚労省に申請して国が出してくれることになっているんです。ただし、保険証を出す市区町村に請求することはおかしいと思ってるんです。全生園で診療を受け保険証を出す、全生園から市区町村に請求が行く。そうすると、市区町村に自分がハンセン病の回復者だとわかっちゃうので、保険料を払っているのに保険証を利用しない回復者が多いんです。この点はいろいろな考え方があると思うけれど、自分は隠さなくていいと思う。一般の病院で診察してもらった時に、自分がハンセン病だったことを言わないと、正しい治療が受けられない。どんな薬を飲んでいとかね。ただ、自分の場合、一見、自分がハンセン病であるということはわからないという強みがあるかもしれない。黒川温泉の事件の後、九州で歯医者さんに診療拒否をされたり、鹿児島でも内科で診療拒否された事例があったと噂で聞いたんですよ。これが、医療の現実。だから、後遺症の程度によっても、退所者の意識は異なっているかもしれない。

退所者が利用できるようにと、並里雅子先生が外来医療を始めています。唯一、菌検査のできる先生。現在、ハンセン病医療の問題として、ハンセン病を専門にするお医者さんがほとんどいないということも挙げられるんです。後遺症の治療ができるお医者さんはいても、菌検査などのできる専門のお医者さんはいない。こういう小さな問題でも大きな問題になってしまうかもしれない。

○退所者の抱える問題

とにかく自分は全てオープンにしているんです。たとえば、今、住んでいる団地も、ハンセン病だったということを隠して、隠したことが原因で問題が起こったら困ると思って。ダメなら仕方ないと思って、ハンセン病であることをオープンにして応募、当選して入居したんです。こうすれば、文句の言いようがないと思って。入居した時も、自治会長さんにきちんと話したんですよ。その時に、その自治会長さんに「自分は十分理解したけれど、すべての住民に、自分がハンセン病であるという必要はない」と言われて、すべての住民に言うことはやめました。こうやって、現実には常に予防線をはっている自分たちは、社会の人たちと気楽につきあうことはできません。ましてやハンセン病を知らない人には特に。そのことは、本当に残念だし悔しい。100年という長い歴史の中で予防法が生き続けてきたから、今なくなったからと言って「もう普通の国民と一緒にだ、変わらない」とは、なかなかそこまでは言い切れませんね。私も、いろいろなことを経験してきたし。だから、テレビ局の取材がアパートに来た時も、たまたま会った住人に自分がハンセン病であることを言えなかったんですよ。自分ですら世間体で気を遣って、自己偏見も払拭できていないし、そういう意味では自分も完全に解放されていない。だからそういう意味では今でも、地域住民がいばん怖い。しかし、アパートの総会にはきちんと出席しているんですよ。もし、何か自分がハンセン病であったことが問題になったら、並里先生などに間に入ってもらうようお願いしている。こういう問題は、当事者だけではダメなんです。理解者が間に入ってほしい。また、退所者の中には、結婚して何年、何十年経っていても妻や子どもにカミングアウトしていない人がいるのも現

実。これは誰の責任だって、ひとりひとり全ての人たちの責任だと言わざるを得ないですよね。自分たちも含めて。（森元さんたちには責任はないと思いますが）もっともっと早く、自分たちが勇気をもって社会に訴えるべきだった。でもなかなか気持ちの変化みたいなのがついていなくてね。悔しいとは思っていたけれども、どうしたらいいかわからなくて。それで最後、もうしょうがないんじゃないかって諦めの気持ちになって、ずっと今日までやってきたんじゃないかと思う。でも、少なくともらい予防法が廃止され、裁判も勝ったとうのは大きな成果。これからは、それに沿うように、ひとりひとりが努力していかなければいけないかなあと考えてますけどもね。でもいろいろな話を聞くと、そう世の中甘いものじゃないかなあと。そうして予防線をはって生きてしまっているんですよ。

*森元さんがお話してくださったお話を大まかに整理してまとめましたので、話してくださった順番とは多少入れ替わっています。

（文責 小畑典子）

[←戻る](#) [TOP](#) [市民学会TOP](#) [進む→](#)